

人はパンのみにて生きるにあらず

平 山 健 二 郎

私が初めて新約聖書を読んだのは中学校に入ってからのものであった。キリストの言葉は新鮮で、刺戟に満ち、また神に対する畏怖の念を惹き起させるものであった。私が感銘を受けたキリストの言葉は多くあるが、その後もしばしば心の中に登場する言葉に「人はパンのみにて生きるにあらず」（マタイによる福音書、4:4）がある。これは人間が生きていく上で大切なものはパンに代表される物質だけではなくて、物質を超えた靈性や神の教えが大切であることを説いているものと理解した。まして、「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」（マタイによる福音書、19:24）と言われると、物質的豊かさの追求は忌避されるべき行為のように思われた。

皮肉なものでその後、私は経済学者の端くれとなった。経済学においては物質的豊かさこそが人類の幸せの根源だと考える訳で、神の言葉には一瞥もされない。それどころかマルクスに到っては「宗教は人民のアヘンである」として宗教は厳しく断罪するのであった。

ところでキリスト教を精神的基盤に置いた西欧世界は 15、16 世紀の大航海時代に南北アメリカ大陸を発見 (!) し、喜望峰周りでインド洋に進出し、東アジアにも到って世界を制覇するまでになった。当初のスペイン・ポルトガルに代わってオランダ・イギリス、やや遅れてフランス・ドイツなども工業国として発展し、18～19 世紀前半は西欧諸国による植民地支配が世界を席卷した。

その後、第二次大戦を経て西欧の植民地に甘んじていた諸国も多くは独立し、国民国家の成立、自由主義・民主主義の政治が世界的規範となったように思われる。つまり 20、21 世紀は西欧的規範が世界を席卷した時代と言えよう。そのような西欧的な考え方が世界的に普及したのは、西欧のもたらした豊かさ、物質の力によるものであるとも言えよう。そうすると「下部構造が上部構造を決定する」としたマルクスが正しかったようにも見える。しかし、そのマルクスが唱えた社会主義の国々もすでに消滅してしまったことを考えると、物質にすべての根柢を置く唯物論も破綻したとも言える。

経済学者の私はこのような想いにふけりながら、しかし、「人はパンのみにて生きるにあらず」という言葉を今も反芻し、ときに聖書に神の言葉を求めているのである。

(経済学部教授)